視　点

「世間師」を育てる

2000年代に入って以降、少子高齢化はますます進んで、人口が減少傾向に入り、家計所得の減少など人びとの生活の質は劣化した。さらに東日本大震災と原発事故により、生活の安全までも脅かされるようになった。こうした社会の危機の進行のなかで、もっとも重視すべきものは地域コミュニティの崩壊であろう。

日本の地域コミュニティは、近代化の過程で大きく変貌したが、それでも人びとの拠り所として一定の機能を果たしてきたことはまちがいない。現在はいわば地域コミュニティ崩壊の第二幕が進行しているといえるが、そのもっとも大きな原因は地域社会の担い手がいなくなりつつあるということである。

そうしたなかで、失われた地域コミュニティを再構築する人材、いわば地域リーダーの存在と活躍が強く求められている。地域リーダーとはどんな人間をさすのか、その大きなヒントは、民俗学者・宮本常一のいう「世間師」にある。

宮本常一はその著書『忘れられた日本人』のなかで、「世間師」についてつぎのように述べている。

「日本の村々をあるいて見ると、意外なほどその若い時代に、奔放な旅をした経験をもった者が多い。村人たちはあれは世間師だといっている。」

「それにしてもこの人の一生を見ていると、たしかに時代に対する敏感なものを持っていたし、世の動きに対応して生きようとした努力も大きかった。」

「明治から大正、昭和の前半にいたる間、どの村にもこのような世間師が少なからずいた。それが、村をあたらしくしていくためのささやかな方向づけをしたことはみのがせない。いずれも自ら進んでそういう役を買って出る。政府や学校が指導したものではなかった。」

ここでの「世間師」とは、「若い時代に、奔放な旅をした経験」から得たことを自らの地域に活かし、「時代に対する敏感」さと「世の動きに対応して生きようとした努力」をもちあわせた人であるといえる。いまよく使われる言葉で表現すると、“Think globally, act locally”であろう。

すなわち、語学力やコミュニケーション能力、専門性をもち、海外でも通用する、いま流行りの「グローバル人材」というよりは、「グローバルな視点をもったローカル人材」こそが地域再生のために必要とされているのである。グローバルな視点は「奔放な旅」、いいかえれば、異なる地域や異なる活動分野での経験からつくられる。そして、活動の舞台はあくまで生活の場としての地域なのである。

ただし、注意しなければならないのは、「世間師」は「政府や学校が指導したもの」ではなく、「自ら進んでそういう役を買って」出ているということである。つまり、かつては地域リーダーが自然発生的に登場していたのである。

これまでの地域リーダーたちは、先輩たちの例を倣い経験を重ねることによって、リーダーとして成長してきたのであり、意識的に育成されてきたわけではない。しかし今後、より多くの地域リーダーを必要とする時代においては、リーダーの登場を待っているだけでは限界がある。より組織的な育成をはかる必要があるだろう。

現代の「世間師」を育てるために、労働組合や労働者福祉事業団体がもっと積極的にこうしたリーダー育成の教育機会をつくることを期待したい。これらの団体が、運動課題としての地域再生をもっと重視し、若い役職員を対象に人材交流をつうじて、さまざまな地域や活動分野といった広い世間を経験するような機会を与えてはどうか。労働組合での活動経験が地域社会で役立つこともあるだろうし、反対に、地域での活動で経験したことが労働組合運動にもいきてくる。

具体的には、自らの現場感覚を使命感として発展させること、活動の舞台となる地域生活およびとくに制度に関する知識と情報を取得する手法、ネットワークを広げ、コーディネート機能を高めるためのコミュニケーション能力の増強、先導者との出会いの場などのさまざまな機会をつうじた先行事例の継承といった点が重要である。

こうした教育機会はまた、次世代リーダー同士のネットワークを拡大し、ソーシャル・キャピタルとしてのリーダー群の確立に大きく貢献するものと思われる。

（連合総研主任研究員　麻生裕子）